089タロー
挿絵:へいろー
valkyrie which makes a baby
子作りヴァルキリー!
戦乙女を孕ませちゃえ
試し読み版
2DB
二次元ドリーム文庫

序章　戦乙女ヴァルキリーとの出会い　006
一章　戦乙女とエインヘリャル　021
二章　戦乙女と初めての子作り　036
三章　水着エッチと二人目の戦乙女　073
四章　レズな戦乙女とマゾ子作り　099
五章　屋外パイズリと三人目の戦乙女　128
六章　戦乙女との運命の再会　151
七章　カノジョな戦乙女と本気の子作り　178
終章　ボテ腹ヴァルキリーズ♥　222

登場人物紹介

Characters

セルヴィス

死霊退治に精を出す戦乙女。凛としていて気が強くヴァルキリーの使命に燃えている。意外と世間知らず面もある。

グリムヒルデ

セルヴィスを敬愛してやまない妹分の戦乙女。その想いが強すぎるあまり暴走することも。

ブリュンヒルト

クールで厳格な歴戦の戦乙女。セルヴィスたちの長にあたり容赦ない一面を見せるが……。

葛城英輝（かつらぎ ひでき）

ごく普通の学生だったはずが、戦乙女が見えたおかげでとんでもない事態に陥ることになる。

セルヴィスは頬を赤くし困ったように目だけで横を見た。
「そんな風になるなんて知らなかったし……普段は小さいのに、なんなのよもうっ」
「ちちち小さくなんかないっての！　いいからシャワー浴びてきなって！」
「分かってるわよ、急かさないでったら！」
ムッとしながらもセルヴィスは部屋を出て行った。気味悪そうにテントを見ていたが、きっと気のせいに違いない。
ちょっと憤慨して英輝はベッドに座る。
「やばい、滅茶苦茶緊張する。俺、バージンの女の子相手に童貞捨てるんだ……」
正直言ってちょっと怖いくらいだった。相手は処女でおまけに無知ときた。リードするよりほかないが、本当はこっちがリードされたい。いくらスケベでも安易にナンパなどできないのも、そういった足枷があるからだ。
彼女は事前にシャワーを浴びるという感覚すらなかった。生まれたままの肌を重ねるということさえ知らないのだ。
そんな相手に上手くいくのか。不安に思っていると、ドアが開いた。
「お、お待たせ……ちゃんと綺麗にしてきた、から……」
いよいよきたと心臓が口から飛び出そうになる。
「お、おう、ああいや、はいっ！　べべ別に待ってなんて――って、うそだろおい!?」
信じられないものを英輝は見た。お風呂上がりの美少女神様は、なんと変わらず服と鎧

を着ていたのだ。
「こういうときはバスタオル一枚だろ！　なんでちゃっかり着直してんの!?」
「ええっ、そ、そうなの？　それじゃどうして教えてくれないのよ！」
「常識だろそんなの！　ああもう、雰囲気台無しだよ！」
「こっちの台詞よ、せっかく覚悟決めてきたのに！」
セルヴィスは肩を怒らせて睨んできた。
そこで気づいた。彼女の白い頬が、すでに薄く赤らんでいる。風呂上がりなこともあるが、緊張しているのだと分かった。
見れば露出している肩も少しだけ震えている。これから何をされるのか、おぼろげながらに悟っているのかもしれない。
（そうだよな、女の子の方がぜったい怖いよな普通）
失敗しても男は情けない思いをするだけだが、女の子は羞恥と共に痛みを伴う。つまらないプライドに固執する自分がちょっと情けなく思えてきた。
「……悪い。ごめん。気が利かなかったよ」
英輝は素直に謝って、彼女をベッドの隣に導く。
「その……俺も初めてなんだ。テンパっちゃってて……ごめん」
「っ……わ、わたしこそ、怒鳴ったりして、ごめんなさい……」
セルヴィスも案外素直に謝った。

「その、さっきみたいなことされるって思うと、こ……怖い、の。自分で触れても、あんな風にしたことないから……」
「えっ、ひょっとして……オナニーとかもしたことない？」
「オナ、ニー？　分からないけれど、きっとないわ」
まさかとは思っていたが、想像以上にこの女神様は初心みたいだった。
きっとイクという感覚すら知らないに違いない。そう考えると大切にしなければという使命感じみたものが湧いてくる。
（こんな綺麗でスタイルいいのにマジでなんにも知らないなんて。やばい、すごく可愛くなってくる……）
この肢体に触れるのは本当の意味で自分が初めてなのだ。興奮と共にときめきが湧いてきて、英輝はそっと頬を寄せた。
「キスは知ってる？　えっと、く、唇同士で触れあうやつ」
「結婚式とかでするあれのこと？　す、少しは……」
「じゃあキスしようよ。ちょっとずつでいいから」
「えっ……ええ。わ、分かったわ……」
隣りあわせで肩を寄せると、揺れる金色の髪からふわっと甘い香りが立ちこめた。
ミルクとライムの混じったような甘くさっぱりとした体臭を吸いつつ、英輝はゆっくりと唇を合わせた。

――ちゅっ……ちゅ、ちゅ……

「んっ……ん、ちゅ……んん……」

頬を染めながらセルヴィスは懸命にキスを受け止めた。目を閉じるという知識すらないのか瞳は薄く開いていたが、恥ずかしいのを我慢して唇を吸われ続けた。

もちろん英輝も初めてのキスだ。緊張でガチガチになり聞き齧りの知識に縋る思いだ。

「ん、んん……こ、これも、子作りなの？　こんなことで妊娠するの？」

「しないよ。でもみんなしてる。子作りしたい人とはみんなしたくなるもんだから」

初めての唇は、どこかライムの味に似ていた。爽やかな柑橘類にキスしたような感じ。同時に唇はとても柔らかく、グミみたいにぷるんとしていて快い。

恥じらいと戸惑いに彼女は少しだけ震える。その肩にそっと手をやりこっちを向かせると、きちんと向きあってまた少年はキスをする。

「んんっ、はぁ、こんなこと、するの……どうして、意味もないのにキスをぉ……んぁ、ちゅくっ……」

「意味はあるって。したいって気持ち、伝わるだろ……」

「そんな、ことぉ……」

無意味だなんて彼女は言ったが決して平気そうではなかった。最初は触れるだけだったキスが、徐々に吸いあうようになってくる。相手の動きにあわせようとしてくる。

少し深く重ねあわせると、戸惑いの反応が少し大きくなった。

「ん、くちゅ……やだ、唾液混じって……どうして、首筋、ちょっとじんとして……」
いきなり身体に触るよりはキスの方がいいと思ったが、予想以上に反応はよくて彼女の声が潤ってくる。
「ちゅぷっ、はぁ……ど、どうしてキスなんて……わたし、あなたの恋――カノジョや妻じゃない、のよ？」
キスは夫婦間でするものと認識していたらしい。少しだけ睨んでセルヴィスは言う。
「それをいうなら子作りだって普通夫婦でだろ？　俺……セルヴィスとキスしたいんだ」
「っ……ばかっ。真顔でそんなこと……」
セルヴィスは照れたように碧眼を泳がせた。
英輝には分かった。セルヴィスは子作りどころか恋愛そのものに疎い。好きな人と触れあいたいという根本すら知らないのだろう。
肩に置いた両手を滑らせ、そっと腰に手で触れる。
「はぁ……やっぱり、触るの？」
「うん。えっと……鎧、脱いでくれるか？　どうやればいいのか分かんなくてさ」
極めて軽装だが鎧なんて扱ったことがない。頼むとセルヴィスは、小さく頷いて胸当てと肩当てを外してくれる。
「これでいいの？　どうしてかしら、鎧脱いだだけなのに、なんだか恥ずかしい……」
セルヴィスは俯き、腕と肩をきゅっと中央に寄せる。

すると上腕に挟まれた胸が、むにゅっと前に押しだされた。
（おおすごい、マジで大きい。ぜったいGカップはあるぞこれ）
胸当ても大きく丸みがあったが中身も相当なものだった。子供の頭ほどもある膨らみが、ドレスのカップに二つ並んで入っている。あらわな谷間はぎゅっと押しあい盛りあがって、より一層肉感的に見えた。
英輝は思わず生唾を飲むと、膨らみに軽くタッチする。
「あっ、いや、胸っ……そんなところも触るの……？」
「うん、これもみんなやってる。まず触れあうのが順序なんだ」
実際は欲望に依るところが大きかった。豊満なバストはやっぱり女性らしさが際立つ。しかも英輝は巨乳派で何もせずになどいられない。
まずはドレスのカップ越しに、ゆっくりとこね回してみる。想像以上に量感があって、掌にずっしりと重みがくる。
「はぁいや、も、揉んで、る……わたしの胸、人間……男の人に、揉まれて……」
セルヴィスの瞳が怯えたように揺れ始める。反応はそれほど大きくないが、腰とくびれが小さく身動ぎしていた。
「こんな、恥ずかしいっ……洗ったりする動きじゃない、指でぐにぐにっ……いや、本当に恥ずかしいっ……」
「分かってるよ、初めてだもんな。けど男って、女の子のおっぱい大好きなんだ。特に大

きいと見てるだけで嬉しくなるっ」
若い肌は綺麗なミルク色で、捏ねるたびに小さく揺れて谷間で重なりむにゅっと盛りあがる。直に触れているわけでもないのに、おっぱいの質感が目だけで分かりそうだ。
このおっぱいを生で見たい――本能的な欲求に負けて、英輝はぐいっとカップをさげた。
「あっいや、見ないで、ああっ！」
――ぷるるんっ、たぷるんっ！
純白のカップから飛びだしてきたのは、目を見張るほどのたわわなロケット型おっぱいだった。
「すごい、なんて大きいんだ。形綺麗だしむっちりしてる、こんなおっぱい見たことない！」
細身な身体についているのが不思議なくらいのサイズだった。しかも隅々までしっかり膨らみ、重そうなのにちっとも垂れていない。たるみのない白い肌は眩いほどに美しく、圧倒的な量感も相まってまさに理想の美爆乳だ。
その先端はというと、白い肌に溶けこむくらい極薄のピンク色をしていた。乳首は小さく色気よりも可憐さがあって、初の視線に少し震えている。
なんとも素敵なその美爆乳に少年が思わず見惚れてしまうと、初心な女神様はそっと両手で隠そうとした。
「ほ、本当に、こんなことしないといけないの？　胸見られるのなんて初めてで……」
「ほ、ほんとだって！　子作りの基本っていうか、ぜ、ぜったい必要だって！」

「ほ、本当……？　これも、子作りに必要、なのね……？」
震える声にも強い恥じらいが色濃く出ていた。どうにか両手はおろしてくれたが明らかに視線を意識していた。
英輝は興奮に鼻息を荒くし、間近でおっぱいを凝視する。
「いや、男の人にまじまじ見られてぇ……あはぁ、息っ、かかってぇ……！」
「ごめん、でもマジで素敵だから目が離せないんだ……」
そっと押し返そうとする仕草がまた男心をくすぐった。その気になれば容易く撃退できるはず。なのに彼女はそれをせず、か弱い姿を見せてくれる。もちろんわざとではないだろうが、だからこそ一人の女の子であると強く実感させてくれた。
少年の両手が、もう一度おっぱいに伸びて揉みこむ。
「んあっ！　だめ、直接なんてぇっ……ああさっきより、ゆ、指ぃっ……！」
「おおぉ、やっ、柔らかい。おっぱいって、こんなに柔らかいんだ……！」
肌はぱんと張りがあるのに乳肉はすごく柔らかかった。少しでも力を入れると簡単に指が沈みこみ、たゆんと弾んで柔らかにひしゃげる。同時に弾力もしっかりあって、力を抜くとぷりりん、と程よく押し返してきた。
その感触は、まるでぷりっぷりの肉まんのよう。温かくて柔らかくてふっくらしていて指に吸いつく。うっすらと浮いた汗の湿り気がまた絶妙に生々しく、卑猥に歪む乳輪の形が視覚的にも興奮を煽った。

「あはぁ、はぁっ、指ぃ、さっきより埋まるぅっ……見られるだけでも恥ずかしいのに、直接触られて指っ、ぐにぐにぃ……！」
生まれて初めての乳揉み感触に、セルヴィスは細かく震えていた。
「やだ、強くないのにっ、揉まれてると……痺れ、ちゃう……胸の奥、じんじんとぉ……」
「ああすごい、乳首ちょっと立ってきてる……触りたい、こっちも触るよっ」
「いや、そんなのだめ、あっ、あああんんっ！」
少し性急だが少年は我慢できなかった。乳首にも指を這わせ、両方いっぺんに刺激する。少し硬化した可愛い突起物が、指の先をぴんと快く押し返してきた。
「だめぇ、触らないでぇっ、じんとしちゃう、変になっちゃう、そんなとこ触られるのわたし初めてで、ああんっ！」
「セルヴィス……ひょっとして、感じてる？　気持ちいい？」
「なっ、なにいって……そんなわけ……！」
セルヴィスは驚いたように言った。
でも英輝は気づいた。彼女の声がどんどん湿ってきているのを。
見れば頬には汗珠が浮き、呼吸が少し荒くなっている。押し返そうとしていた手は、こちらの腕を逆に掴んで震えていた。
おっぱいを揉みながらじっと見つめると、セルヴィスの顔に困惑が広がる。
「気持ちいい、なんてそんな……痺れてるだけ。じんじんしてきて、変な感じして……」

そうは言うものの嫌悪している風ではなかった。強いて言うなら自分でも掴みかねている様子。

だが、乳輪を指先がなぞった瞬間、くふんと甘い声が出たのを英輝は聞き逃さなかった。

「でもさ、気持ちよさそうな声だったぞ。聞いてる俺も興奮するような。そういう声出してくれると、俺すごく子作りしたくなる」

「そんな、こ、声なんかで子作りしたくなるの？　あっ――だめ、顔近づけないで、やだ、く、唇なんてぇ……！」

乳肉を軽くきゅっと搾ると、ピンクの突起がぷくっと突き出て口に含みやすくなる。

その可愛らしい桃色小豆（あずき）を、英輝は唇でちゅうっと吸った。

「あんんんっ！　こんな、赤ちゃんみたいなことぉっ……！」

「ちゅうっ――そうだよ、男っていつまでもおっぱい吸いたい生き物なんだ。セルヴィスみたいな大きくて素敵なおっぱいは特に！」

「そんな、こんなこと子作りに関係な――きゃっ、だめぇ！」

英輝は夢中になるあまり、セルヴィスをベッドに押し倒した。

驚く彼女に覆い被さり、もう一度乳首を口に含んで啜りあげる。

「あんんっ！　あはっ、あはぁ、どうしてこんなこと、んんんっ！　し、痺れちゃう、胸痺れて、じんじん痺れてっ……おっ、おかしくなっちゃうっ……！」

セルヴィスはさらに声を湿らせシーツの上で何度も身動ぎした。当初の反応とはまった

く違う、何かに耐えるような仕草。なんらかの感覚を得ているのはもう間違いなかった。
そんな自分に驚いているのか、セルヴィスはつっと人差し指を噛む。
「はぁ、はぁん、どうして、変な声でちゃうっ……怖い、どうにかなりそうでぇ……！」
「セルヴィス、ああセルヴィス、ちゅぱっ、ちゅぱちゅぱっ……！」
「あはぁだめぇ、これ以上っ、吸わないでぇっ……！」
乳輪を深く吸いこむたびに豊満なバストがぶるぶる揺れた。汗もぷつぷつと増えていって甘い体臭が強くなる。汗そのものが甘く思えてきて、乳首がとても美味しかった。
その艶めかしい乳揺れにあわせて、くびれとお尻がひくひく動く。押しつける形の肉棒に当たってタオルごと刺激してくる。
想像を超えた乙女の反応に、英輝はいつしか酔っていた。
「はぁ、はぁ……セルヴィス、俺のも触ってくれよ。俺、すごい興奮しちゃって」
軽く身体を浮かせると、空いた空間を使って彼女の左手を股間に持ってくる。
「はぁ、はぁ、やっ……なに、これ……あ、熱い。すごく硬い。男の人の性器って、こんな風になるなんて……」
これが欲情の証であることすら彼女は知らないに違いない。これが膣内に入ることなど考えてもみないのだろう。
それでも本能がそうさせるのか、美しい瞳が恥じらいに揺れた。
「な、なに、タオル越しに触れただけなのに、今びくって……」

「俺のここも触られると気持ちいいんだ。セルヴィスのおっぱいみたいに」
「なっ、なにいってるのよ、わたし気持ちよくなんてなっ……んにゃああっ!?」
セルヴィスは一瞬眉を立てたが、次の瞬間には甲高い声をあげていた。英輝の前歯が桃色小豆を甘噛みしたのだ。
細いくびれがぶるぶる震え、豊満なバストがぷるぷると柔らかに波を打つ。
「いやぁ、いや、噛んじゃいやぁっ……！」
「はむっ――セルヴィスって、おっぱい、敏感なのな。すげえ可愛い……可愛すぎるからチンポこんなになってるんだ」
見られる羞恥すら忘れて英輝は腰タオルを剥ぎ取る。むき出しになったギンギンの肉棒を乙女の掌にこすりつける。
「はぁ、はぁ、なっ、なに、これぇ……火傷しそうなくらい熱い。反っていて、脈打って、なんだか怖い……！」
欲情に漲った肉の棒は、エラを大きく張り出させて先から汁を浮かせている。
少年の指が乙女の細指を熱硬いサオに巻きつかせる。
「こうやって握って上下にしごくんだ。ココを触られると男って気持ちいいんだ」
「そんな、こんなのをしごくなんてっ……はああびくびくしてるぅ……！」
セルヴィスは迷いを見せたが、軽く握って少しずつサオをこすり始めた。
初見なのだから触るのも初めてだろう。あからさまに不慣れで動きはぎこちない。それ

でも指の凹凸は心地よく、女性らしいしなやかな感触がグローブ越しにも伝わってくる。
「そうだよセルヴィス、ああ感じるっ……お互いこうやって気持ちよくなるのが子作りの醍醐味なんだ。気持ちよくない子作りなんてやっちゃいけないことなんだ」
「はぁ、はぁ、そ、そうなの？　こんな感覚わたし初めてで、どういえばいいのか自分でもっ……あはぁん……！」
その間にも英輝は乳揉みを絶やさない。より一層ぐにぐにとこね回し、円運動まで加えていく。
そしてその手が、ついに乙女の下腹部に伸びた。
「あっ⁉　いや、だめ、そんな場所までっ！」
セルヴィスは慌てて腰を浮かせたが、かえって好都合となった。豊かなスカートを捲りあげて下腹部を露出させやすくなっていた。
「こんな場所まで見られるなんて、子作りって、なんて恥ずかしいのっ……！」
意外と言うべきか、ちゃんと下着はあった。純白にピンクのラインがある女の子らしいショーツである。膝から下はグリーブがあって、そこがらしいと言えばらしかった。
クロッチに指で触れつつ、英輝は言う。
「可愛いパンツ穿いてるんだな。ひょっとして穿いてないのかもって思ってた」
「そんなわけっ、神をなんだと……あううんっ⁉」
下着越しでもココはやっぱり刺激が強いらしい。女性器としての感覚はちゃんと備わっ

ているみたいだ。
その証拠に、布地の奥からは確かなぬめりが感じられる。
「濡れてる。神様だって感じると濡れちゃうんだ？」
「ぬ、濡れ、る……？　そんな、わたしっ……」
「お漏らしじゃないぞ。子作りしたくなったり触られて気持ちよくなったりすると、女の子ってこうなるんだ」
英輝は言って一度彼女から離れると、足の間に身体を入れてクロッチを覗きこんだ。
「なに、こんなっ……どうしてそんなとこ覗きこむのよぉっ……！」
性に無知なセルヴィスには秘所を見せるという知識すらない。男の行動はただ驚きの連続だろう。
それでも抵抗はあるらしく、豊かな太腿を閉じようとする。が、英輝は逆に足を開かせ、彼女に指示を出した。
「隠さないで。俺だってチンポ見せたんだ、子作りってのはお互い全部を見せあうものなんだ。セルヴィスだって見せてくれなきゃ」
「見せるって、な、なに、を……」
「おま○こだよ。知らないのか？　子作りするとき女の子は必ず自分からおま○こ開いておねだりするんだ」
英輝は興奮しながら言った。やはり彼女は何も知らず、ココを露出させる必要さえ分か

っていない。だからこそ余計に興奮し大胆になっていた。
「そんな、いや、いやよ、そんな恥ずかしいことっ……人間って、そんなことするの？」
いくら神様でもココはやっぱり特別らしい。揺れる碧眼に、信じられないという感情が浮かぶ。
けれど根が真面目で素直なのか。破廉恥な指示を鵜呑みにもしていた。
「ううっ……分かったわ。脱いで開けばいいんでしょう」
セルヴィスは太腿を閉じ、するすると下着をおろして脱ぐ。
そして再び開脚し、両手の指で恐る恐る割れ目を開いた。
「おおおおっ……！　こっ、これが女の子の……すごい、マジでピンク色だっ……！」
少年の目に、二枚重ねの花弁（はなびら）が映りこんでいた。
セックスのセの字も知らないだけあって、大陰唇も小陰唇も一切の穢れない薄桃色だった。折り重なるように咲く花弁は、まるで小さな唇みたいに指に引っ張られ口を開けている。中からはトロリと蜜が溢れてほんのわずかに泡立っており、胸でしっかり感じていたことを如実に物語っていた。
もっとグロいものを想像していたが、さすが神様と言うべきなのか信じられないほど美しい。ハチミツ色の薄い淫毛も形が綺麗に整っていて、まるで一つの芸術品だ。
この秀麗な美ま○こにこれから種付けするのだ。そう思うだけで全身の血が沸き立ち、ペニスは張り裂けんばかりに膨れあがる。

「はぁぁ、はぁぁ、わたしっ、こんな真似するなんてぇっ……」
必死に両足を開くセルヴィスの肩や太腿が小刻みに震える。
「こんなとこっ、同じ女神にだって見せたこと……」
「でも昔のヴァルキリーは人間と子作りしたんだろ？　彼女たちだって見せたはずだよ。ここに――チンポ入れてかき回して、気持ちよくなって中に精子ぶちまけるんだから」
つまりヴァルキリーはセックスできるということだ。濡れているのが何よりの証拠だ。
英輝は割れ目を覗きこむと、鼻が触れるほど顔を寄せた。
「はぁあいやぁっ！　見ないでぇ……まじまじ見るなぁっ！」
激しい羞恥がそうさせるのか、セルヴィスの声は悲鳴に近いものだった。
「こんなとこ見られるなんて、わたし恥ずかしくて……狂っちゃう。耐えられないっ……」
化け物相手にも怯まない女神が男の前で震えていた。凛とした表情も今はなく、未知の感覚と行為への不安が眼差しを弱くしていた。
英輝もまた興奮に震え、淫唇に指を這わす。
「あひゃあんっ⁉　やだそんなっ、触るなんてあり得ない、やめてだめっ、ああんんっ！」
「うわすごい、中からまだ愛液でてくるっ……ぬるぬるしてる、指気持ちいいっ……！」
唾液みたいに泡立った蜜が触れた指を舐め回していった。さらさらとした触り心地だが思った以上にぬめりがある。少し無骨な男の指でさえするりと入ってしまいそうだ。
その一方で淫唇は強く反応しヒュクヒュクと窄(すぼ)まる。閉じようとする裂け目を見ると、

入れたときの締まり具合が想像できそうだった。
目が眩むほど欲情しながら英輝が指でくり返し甘擦ると、たっぷりと肉付いた豊満なお尻が太腿と一緒にびくんびくんはねる。
「あんんんっ、はあっはあっ、もうやめてぇっ！　だめ痺れちゃう、どうしてぇ、恥ずかしいとこびりびりしちゃってっ、あ、頭、まっ白にぃぃ……!?」
胸で感じたおかげなのか、早くも女体は甘い昂りを見せていた。ついに頂が見えたのか、声がますます高くなる。羞恥と官能のわななきにあわせて美爆乳が不規則に揺れる。
セルヴィスはとうとう涙まで浮かせて懇願してきた。
「お願いやめてぇ、怖い、怖いのぉっ！　おかしくなっちゃう、腰痺れちゃう、こんな感じ、今までないっ……！」
「セルヴィス……ああ俺、もう堪んないよ！」
英輝もいよいよ我慢できなくなり、仰向けの彼女に正常位で迫った。
「こんな風に触ったりするんだ。女の子の方からすることだってある。で、ここから本番――子作りだ。セルヴィスのおま〇こにチンポ入れて、ガンガン突いて中出しするんだ！」
すでに肉棒は痛いほど勃起し、オアズケになどなろうものなら発狂してしまいそうだ。
ようやく訪れる初の瞬間に、全身が粟立つほど燃える。
「はぁ、はぁ……あなたの……ヒデキのペニスが、わたしの、ここに……」
頬を汗で濡らすセルヴィスは、やや焦点のあわない眼差しで結合部を見やる。

「い、いいわ。きて……子作り、しなさいっ……」
「分かった。いくぞっ」
準備は十分に見えるが、もう考える余裕なんてない。ここまで待てたことですら奇跡みたいなものだ。
硬く反り返る熱い肉棒が、むき出しの淫唇に触れ、ゆっくりと押しこまれていく。
「あぐっ……は、入って、くるぅ……い、痛っ……」
（セルヴィス、やっぱ処女なんだな。こんな綺麗な女神様のバージンもらっちゃうなんて）
カリだけ埋まった辺りにあった、ほんのか弱い濡れた抵抗感。この感触こそ彼女の清い証なのだ。この先に行き子種まで仕込むのだと思うと、選ばれし者となったような高揚感さえ湧いてくる。
我慢してくれる姿、最高に可愛いっ——強い悦びを噛み締めながら、英輝は腰をぐっと突き出した。
——くちゅぷっ……ぶつっ……ずぷぷぷっ！
「あっ、あああああっ！」
乙女の甲高い声と共に、肉棒の大半が膣口に埋まる。
その瞬間、美しい戦乙女は一人の男によって女にされた。
「はぁはぁ、本当に入ってるっ……男の人の性器、ペニスがぁ……！」
いまだ信じられないのか、結合部を見るセルヴィスの頬が震える。

「お腹の奥、押し広げられてっ……深く、きてる。串刺しにされてる。こんなのが子作りだなんて……」
やはり痛みはあったらしく、秀麗な眉間には小さなシワが寄っている。薄い鮮血を滲ませるラビアは肉棒を噛み締め微震えていた。
「うぐっ……これが女の子の、セルヴィスのおま〇こっ。気持ちいい、堪んないっ……！」
だが英輝に気遣う余裕などない。初めて体感する強い快感にもう打ち震えていた。
セルヴィスの中は思った以上にキツかった。十二分に濡れていたが、かなり窮屈なものだった。
だが、それがまたすごくいい。中は細かなヒダの集まりでぬめりが強いのにぷるぷるとよく擦れ、まるで筒状粘膜の中に極小のグミが敷き詰められているみたい。そのぷるぷるの突起に圧迫されるのが勃起神経には堪らなく甘美で刺激的だった。
「セルヴィス、くっ、動く、ぞっ……！」
「はぁはぁ、えっ、そんな、ちょっと待って——あんんんっ!?」
——じゅぷっ、じゅぷっ、くちゅっ、くちゅっ……
どうしようもなく本能に背を押され、英輝の腰がゆっくりと前後に動きだした。
途端に聞こえるセルヴィスの可愛い声。と同時に、筒状粘膜の柔らかなヒダたちに肉棒がゆったりと摩擦される。
（ぐう、気持ちいいっ！　なんてすごいんだ、オナニーなんて目じゃないぞこれっ！）

指なんかよりはるかに繊細な温かいヒダヒダの感触。緩く肉サオでこするだけでもそれらは十分伝わってくる。体験したことのない凄まじい甘美感が、たちまちのうちに陰茎を痺れさせ尿道を熱く緩ませていく。

正直――今すぐにでもイキそうなくらい気持ちいい。なまじ締めつけが強いぶん擦れる感触も強くて、目の奥に星が飛ぶほどの快感が襲い掛かってきた。

「はぁ、はぁ、こんなぁ、本当に中かき回してきてぇっ……あんんっ！　か、傘っ、引っかいてるぅう……！」

休む間もなく始まった抽送に、セルヴィスは困惑し身動ぎする。

「はぁ、はぁ、せ、性器で、繋がって……肌と肌を、あんんっ！　こんな、恥ずかしくて淫らなことぉ……！」

熱い吐息をくり返しながら彼女はぎゅっとシーツを握る。赤い頬から汗が垂れてシーツに小さなシミを作る。

肉棒を食い締める熱い膣肉は、まだぎこちなさを感じさせて異物を押しだそうとするかのよう。それでも愛蜜はこんこんと湧き続け、粘膜の擦れあいを潤滑にしくちゅくちゅと粘っこい音を立てる。

緩やかに乳房を揺すりながら、セルヴィスは濡れた瞳で聞いた。

「はぁはぁ、これが、これが子作り、なのぉっ……？」

「はぁはぁ、そうだよセルヴィス、これが子作りだっ……このままお互い気持ちよくなっ

て最後に俺が精液出せば、妊娠するかもしれないんだっ……」
そう、ただエッチするだけではない。避妊なしの生挿入で直におま○こをペニスで味わい、受精も厭わぬ生中出しを乙女の膣奥に思うまま決める。男にとってはある意味最高のシチュエーションだ。
それだけで十分興奮するし、初めてのセックスは本当に気持ちよくて堪らない。奥へぐっと押し進むたびに根元まで擦られて肉棒が蕩ける。
なのにセルヴィスは、さらなる興奮材料を投下してくれた。
「はぁはぁ、じゃあっ——出して。ヒデキの精液、わたしの中にいっぱい……」
「せ、セルヴィス……んっ？」
「ちゅっ——キスも、気持ちいいんでしょう？　いいわ、わたしで気持ちよくなっても。ううん、いっぱい気持ちよくなって、しっかり出して。ちゃんと妊娠できるように……」
唇を吸い、優しげな表情で彼女は言う。心なしか、碧の瞳は切なげに揺らめいて見えた。
（かっ、可愛い……！　俺なんかのためにマジで妊娠しようと……くそっ、俺もマジになっちまうっ！）
欲情とは少し違う、熱い恋慕を感じた。この綺麗で可愛い女神様を力の限り抱きたい。欲望だけでなく想いをぶつけたい。そんな気分になってくる。
英輝は正常位のまま、女神様の唇に深く吸いついた。
「んんっ!?　あふ、ひ、ヒデキぃ……あむ、ちゅぷ……」

「くちゅっ、セルヴィス、可愛い、可愛いよセルヴィスっ……！」
ストロークを短く速くしながら夢中でキスをし舌も入れる。溢れる唾液をずずっと啜って自分のそれを代わりに流しこむ。
少しはキスに慣れてきたのか彼女は甘ったるい声を漏らす。舌も自然に受け入れてくれてチロチロと舐め返してくる。
同時に動きにも慣れてきたのか腰が小さく浮き始める。ほんの少しだがおま○こが自分から飲みこんでくる。
興奮に昂る肉棒をわななかせ、英輝は小刻みに膣奥を突いた。
「じゅるるっ、はあはあセルヴィス、すごい気持ちいいっ！　俺イクよ、もうすぐイクっ、セルヴィスの中に精液出ちまうっ！」
「はあぁんっ、はあはあっ、で、出るの？　わたしの中に精液くるのっ？　いいわ、いっぱいちょうだいっ、わたしもなんだか、すごく、すごくっ……！」
小刻みなピストンが乙女を揺すり、たわわに実った美爆乳が楕円を描いて不規則に躍る。桃色の先端が回るたびに、甘い汗が散り鼻腔をも蕩けさせる。
いつしか瞳は目尻を落とし、陶酔したような表情を作る。どこかウットリした悩ましい面持ち、その唇から艶めかしい吐息が間断なく漏れてくる。
「あんっあんっ、どうしてぇ、すごくっ——あはぁ、ほしくなっちゃう……おちんちんの刺激、もっと刺激ぃ……！」

耳元でぎゅうっとシーツを握り締め、息を弾ませてセルヴィスは言う。
「あんっあんんっ、身体っ、熱くなってきちゃう……お腹の奥っ、痺れてきちゃうぅ……やだ、この感じっ、だんだんよくぅ……！」
「はあっはあっ、えっ、セルヴィス……!?」
「あんんっ、ほしく、なってきちゃうぅ……あなたのっ、せ、精液ぃぃ……ッ！」
激しく揺れ動く開いた両足が腰をぎゅっと絡め取る。甘い声音が唇から漏れ、眼差しがどこか切なげに細まる。
本能的に子種を求める、その仕草と悩ましい表情――それを見た途端、どうしようもない高揚を覚えて英輝は目いっぱい尿道を膨らませた。
「っっ～～！　セルヴィスっ、イクっ！　中で思いっきり出すからなっ！」
「ああんっ！　はあきてぇ、思いっきり中にぃぃっ――あああんんんっっ！」
――びゅびゅびゅうううっどぷどぷぷうっ！
温かな奥で白濁が一気に解放された。
必死に我慢したせいなのか、自覚できるほど大量に出ていた。尿道が一瞬痛むくらいに強い勢いで噴出し、圧倒的な解放感が全身を駆け抜けた。
そしてセルヴィスは、甲高い声を部屋中に響かせ白い肢体を大きく震わせた。
「あんんんああっ！　はあっはあっなんなのこれっ、お腹の奥っ、熱い、焼けちゃううっ！分かるのぉ、熱いのくるの、精液くるの、いっぱい子宮に入ってくるの感じるぅぅっ！」

「そのとおりだ人間。一度戦乙女と接続した魂は、無理に引き剥がしたところで死霊同然の存在に堕ちる。死霊は刈らねばならぬ。どの道死霊となるならば、その魂も刈るべきだ」
ゾッとするような冷たい目で言ってくる。
気のせいか、その眼差しには怒りと悲しみが混じっているように英輝には見えた。
「ッ――姉様、考え直して。これはわたしとヒデキの問題なの。いくら神だからってそこまでするなんて――うっ!?」
セルヴィスは怒気まで浮かべて詰め寄ろうとしたが、寸前で足を止めた。
いつの間に出したのか。ブリュンヒルトの右手には光り輝く槍斧（ハルベルト）があり、その矛先がセルヴィスの喉に触れている。
「聞く耳持たぬ。これは命令だ。――一日待ってやろう。その間に自らの手で始末をつけよ。でなければ――私がやる」

*

――夜。英輝はベランダから自宅の屋根にあがった。
「こんなとこにいたのか。捜したよ」
「……ヒデキ……」
星空の下、セルヴィスは膝を抱えて座っていた。
英輝は屋根にのぼり、彼女の隣に腰をおろす。
「……ごめんなさい。こんなことになってしまって」

沈んだ表情でセルヴィスは言う。
「そんな顔するなって。まだ説得のチャンスはあるって」
「……無理よ。姉様は頑固で超がつくほど人間嫌いだもの」
「そうなのか？　まあ嫌われてるって感じはしたけど」
「エインヘリャルなど見出す意味もない。そういいきって人間との接触を拒んできたくらいだもの」
ブリュンヒルトは戦乙女の中でもリーダー的存在らしい。彼女の指示で、長い間エインヘリャルが見出されることはなかったそうだ。
「姉様の命はぜったいよ。力だって経験だって断然上。わたしなんかじゃとても説得できない……」
セルヴィスの瞳が悲しげに細まる。
「死霊探しに出かけてるから今から捜すのも難しいわ。きっと夜明けまで戻ってこない。そして夜が明けてもヒデキがいたら、姉様が自ら手を下す……どうしたらいいの……」
（セルヴィス……ほんと、いい子だよな。いうとおりにしようとは思わないんだ）
おっかない上司に命令されれば普通は渋々従うだろう。相手は神ではなくただの人間、上に逆らってまで助けようなんて考えるやつは稀なはずだ。
思えば子作りしてまで助けようなどと、かなり突飛な発想である。でもそこまでしてしまうのがセルヴィスという女神様なのだろう。

「こんなことなら、もっともっといっぱい子作りして早く妊娠しとけばよかった……」
「……んじゃ、そうするか」
「えっ……」
少し潤んだ碧の瞳を横からぐっと覗きこんで、英輝は笑った。
「そんな顔されちゃほっとけないだろ。泣きそうなくらい考えこむとか真面目すぎるにも程があるって」
「ば、ばかいわないで、誰が泣きそうだなんて……」
セルヴィスは目を潤ませたまま睨んできた。
「ほんと？　今にも泣きそうに見えたけどなー？」
「ふざけないでよ、戦乙女が泣くなんてことっ……ぶつわよこの！」
「じゃあキスしてよ。そしたら見なかったことにしてやるから」
「は……はあ？」
英輝の提案に、セルヴィスは呆気に取られたような顔をした。
「ばかじゃないの？　ぜんぜん交換条件になってない」
「いいじゃないか、セルヴィス見てたらしたくなったんだからさ」
「ばっ――もうっ……」
怒鳴りかけたセルヴィスは、けれどふっと眉から力を抜く。
そして小さく照れ笑いしながら、そっと唇を寄せてきた。

「変な人。朝には死ぬかもしれないってのに」
「もう死んでるしな。綺麗な誰かさんのおかげで」
「ばかっ……ちゅっ」
二つの唇がぴったりとくっついてそのまま止まった。
（セルヴィスの唇、やっぱ気持ちいい。神様って唇も美味しいのかも）
柑橘系に似たさっぱりとした風味が唇の粘膜に広がる。夜風にそよぐ金の髪からは甘やかな香りがふわっと届き、鼻腔をくすぐって牡の本能を刺激した。
一分くらいそうしてただろうか。唇を離すと、少しだけ物足りなそうな表情と出会う。
「……し、しないの？　その……子作り」
「えっ、あー……もも、もちろんするって！」
英輝はちょっとだけ焦ってしまった。正直に言うと、この状況でＯＫされるなんて思っていなかった。
（でもセルヴィスからいってくるなんて初めてだな。まあ俺もしたいっていったけどさ）
気のせいだろうか、彼女の瞳には期待感じみたものまである。
自惚れかもしれないが、ここでやめるなんてカッコ悪い。英輝はもう一度キスをしつつ、豊満なバストをやんわりと揉んでいった。
「んはぁ、ヒデキぃ……ちゅっ、手、鎧の中にぃ……」
「セルヴィスのおっぱい柔らかいからさ。こうやって手、入れると気持ちいいよ」

「はぁヒデキぃ、んっ、ちゅぷっ、はぁぁ……」
乳首の辺りを重点的に捏ねてやると、キスは徐々に小刻みになって唾液の量が増えていく。粘っこい音が互いを熱くし、身体の触れあいもその面積を大きくしていった。
「はぁ、はぁぁん、キスぅ、胸ぇ、あんん痺れちゃう……どうしてなの、ヒデキにされるといつもこんな風にぃ……」
「きっとセルヴィスが敏感だからさ。ずっと知らなかったけど、身体の方は子作り大好きな体質なんだ」
「そんな、子作り好きだなんてぇ……あんんっ！　乳首ぃ、両方とも摘まないでぇ……！」
少々強引に胸当てをずりさげおっぱいを二つとも露出させると、英輝は先端の桜色をきゅきゅっと上に引っ張りあげた。
「はぁあ、あはぁん、む、胸ぇ、乳首ぃ、じんじんしちゃう、熱い、熱いのぉ……ッ！」
頬に汗を浮かせてセルヴィスは腰をくねらせ始める。英輝にも分かるようになってきた、彼女の昂りのサインだった。
（セルヴィスってほんとおっぱい弱いんだな。なんていうか、触り甲斐のあるおっぱいだ）
男にとっておっぱいは女性の象徴の一つだ。赤子の頃から吸っていたせいか、触って吸うことに妙な執着がある。豊満なバストに母性を感じるのも無理からぬ話だろう。
そのおっぱいを思うまま揉むのはきっと男の永遠の悦びだ。好みのサイズなら尚のことよく、感じてもらえれば最高に燃える。

「はぁはぁん、指埋まるぅ、あんん、ぎゅ、ぎゅってぇ……はぁぁ、熱いのにだんだん、と、蕩け、ちゃうぅ……！」

夢見るようなぽーっとした表情で吐息を熱くするセルヴィスの姿は、いつまで見てても飽きないくらい艶めかしくてすごく燃える。

英輝はその場で立ちあがると、ズボンをおろしていきり立つ肉棒をズイと突き出した。

「セルヴィス……コレ、おっぱいで挟んでくれないか？　セルヴィスのおっぱいで気持ちよくなりたいんだ」

「はぁ、はぁ……え？　どういうこと、よく分からないわ」

ぽーっとしたままセルヴィスは聞いてくる。子作りのやり方すらちょっと前まで知らなかったのだ、当然の反応だ。

英輝は肉棒をおっぱいに押しあて、谷間でぎゅっと挟んでみせる。

「こうやって挟んでおっぱいを上下に動かすんだ。おま○こでチンポをしごくのと一緒さ。包みこんでこすってやるとチンポが気持ちよくなるんだ」

「そ、そんな恥ずかしいこと……なんてこと考えつくのよヒデキったらっ」

「ち、違うって、みんな知ってるプレイだよ。パイズリっていうんだ。知らなかった？」

「本当に？　いやらしいヒデキが騙そうとしてるんじゃないでしょうね？」

そう言って睨んだが、本気で疑ったり怒ったりしてはいないらしい。恥ずかしいのをごまかそうとしたのだろうか。

「じゃあ、やるわよ。ちゃんと教えてよね、分からないんだから」
セルヴィスはおっぱいに手を添えると、谷間に軽く圧をかけてゆっくりと動かし始めた。
（おぉ、これがパイズリかぁ……なんか、気持ちいいってよりまず癒やされるかも）
快感よりも感動の方が先に立った。適度に弾力あるふわふわの感触は、なかなかに心地よいが射精感がくるほどではない。それでも、大きなおっぱいが包みこんでくれること自体に不思議な幸福感を得られていた。
「んっ、はぁ……こう？　こんな感じ？」
膝立ちで動きながら、セルヴィスは聞いてくる。
「おちんちん、む、胸で感じるなんて……硬い……近くで見ると、怖いくらい……」
「俺は興奮するよ。セルヴィスのおっぱい、ほんと大きくてチンポ隠れちまう……」
メロンほどもあるたわわな乳房が柔らかにひしゃげて包みこむ様は、ただ見ているだけでビジュアル的にも興奮する。目の前にいるのは金髪碧眼の美しい女神。そのおっぱいにご奉仕されて悦ばない男なんていない。
一方でセルヴィスは、徐々にコツを掴んできたらしく動きをスムーズなものにしてくる。
「ああん、やだ、まだ……硬くなってくる。こんなに反りかえって、あん、先端、出ちゃうじゃない……」
振り幅が大きくなってくると、谷間からカリが出て乙女の喉元まで迫る。
その震える鈴口を見下ろして、セルヴィスは悩ましげな吐息を漏らした。

「はぁぁ、いやらしいにおいっ……鼻につーんときちゃう。けれどこれっ、き、嫌いじゃない、かも……」
「セルヴィスもいやらしい顔してるよ。すぐにでも中にほしそうな感じだ……」
「そ、そんなことない、わたしほしくなんてぇ……あはぁぁ……♥」
おっぱいを左右に軽く揺すってセルヴィスは色っぽい声を漏らした。
見ればまぶたが少し落ち、トロンとした目になっている。頬は上気し興奮してるのは間違いないが、それだけでなく気持ちよさそうな表情だった。
「どうして、はぁ、はぁ、触ってるのはわたしなのに、じんじんしてきちゃう……指、感じる……おちんちんでも、熱くなって……」
そういえば彼女はオナニーすら知らないと言っていた。おっぱいを慰めた経験もないため、オナニー感覚で高まっているのかもしれない。プラス肉棒との触れあい効果で興奮が加速するのか。
なんにせよ英輝もどきどきしてきて、自分から腰を軽く揺すった。
「あんんっ⁉　やだヒデキっ、動かないでぇっ……！」
「ごめん、おっぱいでイキたくなってきて。――セルヴィス、チンポに唾液垂らしてくれないか。ぬるぬるにしてこすってほしい」
「ええっ、そんな、ここに唾液を、だなんてぇ……」
セルヴィスはより赤く頬を染めて、戸惑いの仕草を見せた。

「頼むよ。その方がよく滑るはずだから。それでしごかれたらもっと感じるよきっと！」
「そんな、ヒデキを、かっ、感じさせるためだなんて……！」
彼女は小さく首を振ったが、それでも離れようとはしない。碧の瞳には官能の炎が燻っていて、本音では刺激を求めているに違いなかった。
その証拠に、恐る恐る唾液を垂らすと、ゆっくりとまたおっぱいを揺すり始める。
「はあんん、すごい、本当にぬるぬるして……だめぇ、さっきより感じちゃう……ッ！」
「はぁ、はぁ、俺もだよ、すごいよこれ、感じ方滅茶苦茶よくなるっ……！」
纏わりついた唾液のぬめりは想像以上のものだった。程よくペニスとおっぱいに絡み、見事に潤滑油となっている。摩擦感が一気に増して、快感が感動を上回り始めた。
おまけにセルヴィスまで気持ちよくなっていく様子だ。初めは躊躇っていたのに、もう吐息を弾ませ始め、ゆっくりだった上下運動をだんだんと加速させていく。
「はぁはぁ、やだっ、どんどんこすれるぅぅッ……いやらしい音くちゅくちゅしてる、聞いてるだけで変な気持ちにぃぃッ……！」
「はぁ、はぁ、セルヴィス、やっぱおっぱい弱いんだな。すぐ感じちゃってさ」
「そんなことぉ、わたし気持ちよくなんてぇ、あんんんっ♥」
自分でおっぱいを大きく持ちあげセルヴィスは官能に甘く鳴いた。ずるりと擦れたエラの感触ではっきり感じてしまったらしい。語尾もトロトロに甘ったるく、快楽にのめりこむ乙女そのものだ。

「あんんいやぁ、わたしいやらしくなってくぅッ……感じちゃう、おま○こみたいにおっぱいまで蕩けちゃうッ……あはぁ、指で揉むのまで気持ちよくなっちゃうぅ……ッ！」

ついには指を蠢（うごめ）かせて自ら乳肉を揉みしだき始める。カリ首に擦れる感覚がいいのか意識してずりずりこすりつけて、左右個別で上下に揺すり濃密な摩擦を加えてくる。

「ああん気持ちいいっ、傘ずりゅずりゅいいのぉ、指もいいのぉ、止まらないぃ……ッ！」

「はぁはぁ、セルヴィス、おっぱいそんなに夢中で揺すってっ……すごくいいよ、すごく感じる、マジでパイズリでイキそうだよっ！」

不規則に揺れ動くおっぱいの摩擦に英輝も思わず腰が震えた。はっきり言ってさっきより何倍も気持ちいい。乳首がどんどん膨らんできて上下に忙しなくこすれあう姿にも、物すごく肉欲を刺激された。

それは彼女も同じみたいで、熱く潤んだ碧眼に切羽詰まった色を浮かべる。

「んあぁ乳首もいいのぉッ、どうしてぇ、わたしこんなっ、おっぱいだけでぇぇ……ッ！」

「いいんだ、おっぱいだけでイケるセルヴィス最高にエロくて可愛いよっ！」

「あんいやぁ！　そんなこといいながら腰振って、ああんんっ！」

――ずんっずんっずんっ、じゅぷっじゅぷっくちゅっくちゅっ！

こみあげる愉悦に身を任せて英輝は腰をピストンさせた。想像を超えるパイズリ快楽に尿道は早くも破裂寸前。これ以上は待つことができず力強く谷間を突く。

「あんっ、あんっ、あんんッ、だめぇッ！　すっ、すごい、パイズリすごぉいっ、こんな

に感じちゃうなんて、おっぱい抉られて気持ちいいなんてぇッ！」
セルヴィスもとうとう腰をくねらせてよがった。夢中になりすぎて歯止めが利かないのか両手でぐいぐいおっぱいを締めつける。すり潰すようなその圧迫が肉棒にさらなる愉悦を与え、より加速するグラインドが豊満な乳肉を柔らかに弾いた。
「はあっはあっ、おちんちんすごぉい、どんどん硬くぅ、いっぱい脈打ってるぅぅっ……だめぇこんなのぉ、わたし神なのに、戦乙女なのにぃぃッ……！」
今やペニスが抉りこむごとに彼女の嬌声は高くなっていく。摩擦熱と官能によって白い肩がひくひく震え、スカートに隠れた豊かなヒップは左右にふりふりと揺れ躍る。夜空の下という事実すら、迫りくる絶頂にかき消されているようだった。
「はあっはあっ、もぉだめ蕩けちゃうぅ、おっぱい弾けちゃうぅ、焼けちゃうう……ッ！」
「セルヴィス、はあはあ、外なのにこんなに声だして乱れて、ほんとエッチなヴァルキリーだねっ……！」
もちろん他人に聞かれたりはしない。神様である彼女の声は普通の人には聞こえない。
それでもあえて口にすると、セルヴィスは、今にもイキそうな表情で必死に言い返した。
「はあっはあっ、ばかぁ、こんなの全部ヒデキのせいぃっ……あっ、あああああっ！」
――びくん、びくびくびくんっ！
乳首をきゅうっと捻りあげられるとセルヴィスは堪らずおとがいを反らした。背筋がわななき、お尻がヒクつく。反論中の不意打ちの愉悦に乳性感が耐えられなかったのだ。

たちまち肉棒が愉悦にわななき熱塊が噴きだしそうになるも、英輝は負けじとおま○こに舌を入れクリトリスにまで指を這わせる。
「んんむむううんんっ!!　はふぅはふぅ、しょこらめぇ、イふ、イふイふイふぅうんっ！」
「じゅるるるっ！　リュン、お、俺ももう限界っ……出すぞ、久しぶりの妻の口に子種を注ぎこんじゃうぞっ！」
「んんんっ！　んんんっ！　ひてぇ、らひてぇ、しゅきよぉ、あいひれるのぉおおっ！」
深く咥えたまま感極まって叫ぶブリュンヒルト。
その温かく濡れた口内目がけて、英輝は存分に放出した。
――びゅくるるるうううっ！　びゅくびゅくびゅくどびゅっ！
「んむううううんんんっ♥」
咽せるほど喉奥に出されたというのに彼女は歓喜の面持ちでイった。媚肉の奥からどぱっと蜜が出て尻肉がぷるぷると官能に波打つ。未経験者でも分かるくらいのはっきりとした絶頂の反応だった。
「はぁ……はぁ……リュン、イったな。ちゃんと待てるなんて、さすが俺の嫁だな」
「んくっ、ごくっ、ごくっ――はぁぁ、はい……あなたの妻として当然のことです……」
残さず全部飲み干してから、唇がゆっくりとカリ首を離す。唾液と精液の混じった糸が、つぅと伸びて切れて落ちた。
「久しぶりのお子種、とっても美味しい……あの頃の味のまま。ああっ、これが胎に根付

く日をどれほど待ち焦がれたことか……」
「リュン……」
「お願いです。どうか……抱いてください。シグルズを、いいえヒデキを感じたいのです」
愛欲に蕩けきった顔でブリュンヒルトは言う。しなだれかかってくる肢体は火照り、今や熱いくらいだ。
「抱いてください……心と身体の渇きを、隅々まで満たしてください……」
「分かった。じゃあ――キミが上になって」
英輝は頷き、ベッドに仰向けに横たわった。
「さあ、自分で入れるんだ。ほしいんだろ？」
「ああそんな、なんて破廉恥な真似をぉっ……」
彼女は恥じらったが、それでも我慢できないらしく、そっと腰を跨いでくる。
「さあ、自分でおま○こ開いて」
「ああっ、ひどい、普段は優しいのにまぐわうときにはなんて意地悪……！」
言葉とは裏腹に声は悩ましくなる一方だ。普段厳しいぶん惚れた男には依存し尽くしたい、そういう女だと前世の記憶が言っていた。
（すごく興奮する。こんな美人なお姉さんに騎乗位命令できちゃうとか！）
英輝としての意識が強いぶんドキドキ感も強かった。年上の美女を開発している気分になれたし、ほしいくせに戸惑う姿が一段と男心をくすぐった。

ブリュンヒルトは震えながら花弁を開くと、精液に濡れるそそり立つ男根をゆっくりと中へ飲みこんでいく。
「はうぁあっ……！　か、硬い、です……すごく硬い、鋼みたいで、それに熱いぃ……！」
彼女はウットリと腰をくねらせ久々の男根の感触に浸った。
「リュンのおま○こもすごい熱い、ぐっ、なんだこれ、すごいザラザラするっ……！」
英輝の腰も、反射的に震えてしまう。
彼女のおま○こはセルヴィスのともヒルデのとも違っていた。ヒダの凹凸はなだらかなのに表面にすごくザラつきがあって、なんとも甘美な独特の摩擦感を生み出している。締めつけも程よくぬめりも十分で、初めてのときにも負けないくらい感じてしまっていた。
これが噂に聞くカズノコ天井というやつだろうか。そんな風に思っていると、膣の入り口がきゅうきゅうとリズムよく締めあげてくる。
「はぁあ素敵ぃ、あなたのオチンポずっと待ってたのぉっ……やっとまた一つにぃ……！」
心の底から嬉しそうにブリュンヒルトは小さく笑った。
「見てください、あなた専用のおま○こ、嬉しくてきゅうって窄まってますぅ。きっと子宮も降りてきています。あなたのお子を孕みたいって……」
「リュン、それって……」
「はい。あなたの、ヒデキのお子を孕む務め、どうか私にやらせてください……」
その笑顔は慈愛に満ちていて、厳しいお姉さんな印象とはひどくかけ離れている。甘く

丁寧な言葉遣いには男を立てようとする意思があり、まさに尽くす女だと思えた。
それだけで英輝の胸は高鳴ったが、続く台詞は強烈なとどめとなった。
「愛しておりました。いいえ、今でも心から愛しております。どうか今度こそ、永久に妻であることをお許しください……」
「リュンっ……！　分かった、妻にする。今度こそ子を産ませるっ！」
「ああっ、嬉しい……♥」
二人は自然とキスをしていた。シグルズとしてでなく英輝としても惚れてしまっていた。
やがて二人は、示しあわせたように腰を揺すりだす。
「あっ、あっ、あっ、あっ！　素敵です、深く届いて、あはぁ満たされますぅっ！」
「リュンも素敵だよ、なんて気持ちいいおま○こっ……久々じゃなくてもすぐイキそうなくらいだっ！」
「あはぁ嬉しいっ、ヒデキ、ヒデキぃっ♥」
すっかり悦楽に浸った様子で艶めかしく動くブリュンヒルト。
だが英輝は、早くも切羽詰まって呼吸が乱れてきた。
（やばい、マジで気持ちよすぎるっ！　本物のカズノコ天井だこれっ！）
ザラザラの粘膜は想像以上に刺激が強く、ほんの少しこすれただけでも肉棒がびくびくと痙攣した。これぞ名器と思わせる蜜壺は息が詰まりそうなほど気持ちよくて、勃起神経はみるみるうちに甘く蕩かされていった。

「はあん、あはあん、嬉しい、素敵ぃ、気持ちいいですヒデキぃいっ……！」
一方のブリュンヒルトも、腰を前後に擦りあわせながら官能の吐息を漏らしまくる。
「オチンポ素敵ですぅ、いやらしいおま○こぐりぐり抉ってぇ……！　はあ脈打ってます、気持ちよさそうに動いてます、はうんいっぱい愛されてますぅぅ……ッ！」
本気で溺れてしまっているらしく声も仕草もひたすら甘い。気持ちよさげにまなじりを落として小鼻までヒクつかせている。
その姿はとても妖艶で、まるで蜜を吸って悦び悶える蝶のよう。サラサラと揺れる長い黒髪が余計に淫靡に感じられた。
彼女の色香にのめりこみつつ、英輝は胸に手を伸ばす。
「はぁ、はぁ、リュン、おっぱいも触るぞっ。いいか？」
「はぁ、はぁ、はい、どうぞ胸もぉ……！」
ブリュンヒルトは鎧の胸当てを両手でかばっと開いた。カップ部分が観音開きになっていて、白い衣装に包まれた豊満な膨らみが出てくる。
その白布をぐっとさげると、目を見張るほど巨大なおっぱいが、ぶるんっ、と勢いよくこぼれ出てきた。
「おおお、大きいっ。なんておっぱいなんだ、まるでホルスタインだよっ」
「あなたに揉まれた結果です、あはぁん、こんなに育ってしまってぇ……」
セルヴィスの胸も大きかったが、こちらはさらに一回り大きい。まるで大玉スイカが二

つぶらさがっているみたいだ。張りと柔らかさも抜群なようで、根元と膣口がドッキングするたび大きく弾んで揺れていた。

その特大バストをぐっと掴むと、ブリュンヒルトはさらなる官能にびくっと震えた。

「ああっ、胸も感じますぅっ！　はぁ、はぁ、やはり胸はお好きなんですね、はあんっ、だめぇ、引き伸ばしながら揉むなんてぇぇ……！」

感度もいいらしく、目いっぱい手を広げ揉みこんでいると乳首がみるみる膨らんでくる。乳輪までぷくりと膨らんできて、かなりいやらしいおっぱいだった。

英輝はふと思いつき、おっぱいを持ちあげて口元に寄せてやる。

「はぁ、はぁ、リュン、乳首咥えて。自分で支えて舐めるんだ」

「そ、そんな、なんてはしたない真似をぉ……！」

愉悦で潤んでいた黒い瞳に困惑の色が浮かびあがった。唇が震え、吐息が乱れる。

それでも容赦せず英輝はおっぱいをぐいっと押しあげた。

「さあリュン、いやらしい乳首を自分で咥えるんだ」

「はぁはぁ、は、はいぃ……あむっ、ちゅるちゅる……！」

恥じらいながらも彼女は従い、両手で持ちあげ上を向いた突起を咥える。ホルスタイン級の爆乳ならではの行為だった。

そしてそれは効果覿面だった。乳首を舐めるたび彼女のリズムが乱れてきたのだ。

「ちゅるっ、あむ、ちゅるっ……はぁぁ、なんてはしたない、戦乙女ともあろう者が自分

で胸を慰めるなんてぇ……！」
「はぁ、はぁ、思い出したぞ。リュンは昔っからオナニー大好きだったもんな。ほかのみんなには隠してても俺はちゃんと知ってたんだから」
「そんな、そんなっ、いわないでぇぇ……！」
そう、思い出した。恥ずかしい思いをすればするほど彼女は燃えるタイプでもあるのだ。ならばと英輝は腰の動きをぴたっと止めた。次いで彼女に自分で動くよう目で合図する。すると彼女は、ますます困惑し声を震わせた。
「そんなぁ、自分でなんて恥ずかしいぃッ……はぁあでも、従いますぅ、オチンポ自分で咥えこみますぅッ……！」
彼女はそう言って自分だけ腰を揺すり始める。
「あんっ、はあぁ、咥えこんでぇ、私自分からぁッ……んんっ、いやらしい音してるぅ、おま○こくちょくちょ卑猥ですぅッ……！」
「おお気持ちいいっ、でもだめだよリュン、おっぱいもちゃんと咥えてないと」
「はぁ、はいいッ……ちゅるっ、ちゅるちゅるぺちゅぺちゅっ……！」
その姿は、なんとも淫らで興奮するものだった。自分で自分のおっぱいを持ちあげ勃起乳首を交互に啜り、そそり立った肉棒を跨いでせっせと膣肉でしごきたてる。動きやすくするためガニ股になるところなんて、物すごく破廉恥で見ていて燃えた。
「んんちゅるっ、ぺちゅるるっ！　はぁはぁ、いやらしい、私いやらしいぃッ……戦乙女

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

二次元ドリームノベルズ

とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー

幻想魔王シャイン・ミラージュ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャルにとらわれないドキドキ★ラブ

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

呪詛喰らい人師

キルタイム・コミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹ちゃん

ハルキ

二次元ぷち文庫

あの人気作品の外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないキッチンベル！

「小説家になろう」の男性向けサイト「ノクターンノベルズ」から書籍化！

ピュア・キラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索